



みんな なかよく げんきに のびよう

三つの宝「①つくしくまわりを ②がおてあいさつを ③ちんとくつならべ」

令和6年度 第17号
熊本市立植木小学校
令和6年6月11日
校長 東田 昌樹

「五色百人一首プレ大会」で学校に文化の香りを

6月10日(月)より「五色百人一首プレ大会」をしています。
ひらがなを学習している途中の1年生は、まだ始めていませんので、2年生以上の大会です。

2学期と3学期は、1年生も交えて学校行事として「校内五色百人一首大会」をします。1学期も「学校に文化の香り」を持ってきたいと思い、校長主催で昼休みに実施しています。梅雨の時期に入り、外遊びができにくいという理由でもあります。今回は希望者の参加で、一つの色だけでなく、どの色にも参加できるようにしています。学年差もつけていません。「五色百人一首」は、上の学年の子どもが必ずしも強いというわけではありません。



「五色百人一首」は、百人一首を20枚ずつの五色(青色・ピンク色・オレンジ色・緑色・黄色)に分けてある教材です。百人一首を100枚のまま全部やると、30分以上かかります。20枚であれば、1試合が5分ぐらいで終わります。慣れてくると3分以内で終わります。植木小では、1時間目の前の朝の時間等で学級ごとにやっています。

植木小では、「有名詩文の暗唱(日本語好きだ検)」と「五色百人一首」を学校の文化にしています。

『声に出して読みたい日本語』(草思社文庫)がベストセラーになった明治大学教授の齋藤孝氏は、次のように言っています。

母国語能力をしっかりとトレーニングすることは、心の情緒の安定につながる。母国語能力の向上のためには、名文を暗誦・朗誦することが不可欠だ。何度も反復して朗誦することによって、内容以上に言語のもつ根源的なリズムとしての力が、自分の身に染み込んでくる。

この蓄積が、たとえば話すときや文章を書くときなどにも生きてくるのである。

『子どもに伝えたい〈三つの力〉生き方を鍛える』(NHKブック)

古来の美しい響きの日本語、五・七・五や七五調などのリズムのある日本語を読んだり、聞いたり、覚えたりしてインプットすることにより、その蓄積が話すこと、文章を書くことなどのアウトプットに生きてくるということです。

「五色百人一首」のよさは、「日本の伝統文化」に触れること、「日本語の美しい響きとリズム」を体得すること以外にも、「友達と一緒にやるよさ」「集中力が高まるよさ」があります。

「五色百人一首」はルールやマナーを守らないと楽しくありません。自分の方が取るのがちょっとでも遅かったら「どうぞ」と相手に譲ります。最初は負けたことにイライラして、「楽しくない」という人もいますが、何度もやるうちに、勝つこともあれば負けることもあることがわかります。負けを受け入れることも学びます。やっていくうちに友達と仲よく、楽しくやれるようになります。

また、子どもたちが「五色百人一首」をやっている場面は、教室が心地よい緊張感に包まれます。「集中力」が磨かれます。教師の読む声を聞き逃すまいと、子どもたちは札を取る前にシーンとします。1試合終わった後、緊張が少しゆるんで「やったあ」と喜びの声や、「1枚差で負けたあ」とがっかりする声が聞かれます。特に大会ではそうです。このメリハリがいいのです。「五色百人一首」をしている子どもたちの集中力は、他の場面でも生きてきます。